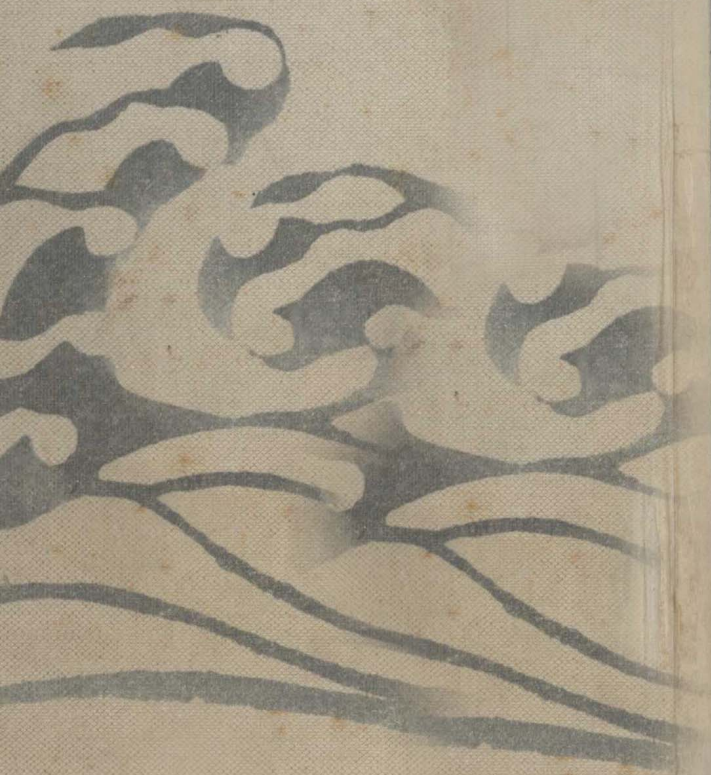


海音寺潮五郎全集





九一

海音寺
潮五郎
全集

海音寺潮五郎全集 第二十一卷

史論と歴史隨筆

全二十一卷・第十九回配本

九〇〇円

昭和四十六年四月二十日發行

著者 海音寺潮五郎

装幀 芹澤銈介

発行者 角田秀雄

印刷所 凸版印刷

發行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

目次

史論と歴史隨筆

日本歴史を散歩する

- 秘剣示現流（三） 倭寇物語（二七） ボッケモン人国（三）
町人の話（三七） 唐風觀月（四三） 盜賊皇族と天皇の捕物
（四四） 将門時代の服飾と刀剣（四六）

乱世の英雄

- 兵法者（四八） 玉の輿物語（五九） お大名（六五） 戦国英雄
の性格解剖（六九） 雞肋集（七九） 乱世の英雄（九〇） 物語
武勇伝（九六） 西郷南洲の悲劇（四一） 西南戦争遺聞（一四四）
王朝時代の幽霊（一五〇） 明治維新史管見（一五三）

得意の人・失意の人

なよ竹草紙（二五八） 利休と織部（二六〇） 金と女（二六三）

チリ紙と樋（二六五） かくれ門徒の話（二六七） 仙女伝（二七〇）

歴史随談（二七九）

実説武俠伝

武蔵の強さ（二八〇） 上泉伊勢守（二八三） 武士と博徒（二八九）

森ノ石松（二八七） 武士のばくち（二九〇） 国定忠治（二九三）

史談うらからおもてから（二九七）

歴史随談・秘剣示現流

義経と弁慶（二九二） 田兵父子（二九三） 運命を操った男

（二九七）

史談・切捨御免

歴史と人物（三〇〇） 古文書いじり（三〇三）

執念谷の物語

殿様の限界（三〇七）

随筆

三七三

名匠伝1・刀匠(三七五) 名匠伝2・陶工(四〇九) 海音寺
ガミガミ説法(四四八) 南征茶記(四八〇) 薩摩魂は失われ
ず(四八四) 鳳(四九〇) 馬鹿な話(四九二) サイゴン河の水
の音(四九六) 遊びとへつらい(五〇八) 民話的豪傑(五二二)
玄宗と楊貴妃(五二六) 神医(五三〇) これくらいの楽しみ
は(五三六) 床の間のカークウッド(五三八) 中国版・日本
外史(五三二) 日本の道路(五三五)

現代小説

五三七

鶏騒動

五三九

生きる

五四七

現代図 昭和二十一年の風景

五五八

酒飲天国

五七四

豚鶏夫婦

五七九

田舎みやげ

五八九

今はむかし

六〇五

海音寺潮五郎年譜

六一五

史論と歴史隨筆

秘剣示現流

日本歴史を散步する
昭和三十一年二月・鱗書房刊

一

中里介山氏の「大菩薩峠」の中に、机竜之助と、人斬り新兵衛とあだ名をとった暗殺名人田中新兵衛とが、京都近くの街道筋で衝突して、あわや血の雨を降らそうとするところに、新選組の隊士の一人で神伝鹿島流の達人である山崎蒸が仲裁に入っておさまる場面がある。

竜之助はれいの音無しの構え、田中新兵衛は履いていた足駄をぬぎはなつや、二間ばかりも飛びのいて、三尺無反の剛刀を引きぬぎま上段にとつて、「ヤー」と大喝する。そのへんの息づまる描写の巧みさは、さすがに介山氏の筆である。これが現代文学で示現流がとりあつかわれた最初であろう。

次には、直木三十五氏が「南国太平記」であつかった。これは薩摩のお家騒動を材料とした小説なので、立廻りの時には必ずといってよいくらい示現流が出てくる。

直木氏はこの小説を書くにあたって、わざわざ薩摩に行つて、この剣法を実見して来ただけに、形も意気も実によくこの剣法を活写していたが、介山居士は実見はしていなからしく、意気は別として、形は違ったものとなつてゐた。

示現流には、普通の剣法のように、上段、中段、下段等の構えはない。八双のかまえ一つである。しかも、その八双も、普通の剣法の八双のように、ゆるやかな構えではない。グンと腕を上げて、天に冲せよと剣尖を高く上げ、そこから、裂帛の絶叫と共に左右交互に斬撃して行く。常に袈裟がけに斬つて行くわけだ。稽古の凄烈果敢さは、見ていて胸がゆらいでくるほどだ。

この剣法は、現存する諸剣法の中では、古流に属するものであろう。防具をつけて、二人相むかつて竹刀で叩き合うやり方ではない。稽古はすべて独り稽古である。したがつて、防具はつけない。木剣でやる。その木剣も刀の形に削りなしたあの普通のものではない。「ユス」という木があるが、その丸太を適当な長さに切ったものを用いる。木質が緻密で、ねばりがあり、相当に重い木だ。

基本稽古は、立木打ちである。本流では柱大の直立した丸太を袈裟がけに左右から、支流の薬丸派では一間ほどの

距離をおいて高さ二尺ほどの台を左右に立て、その上に長さ二間くらいの拇指ほどの太さの木を無数にわたして、これを絶叫と共に打って打って打ちまくるのだ。初心の間は手にひびいて痛いから束ねないでグサグサにしておくが、熟達して来ると堅く束ねたやつを打つ。これは実際には横木打ちというべきだが、やはり立木打ちといっている。本流でも葉丸派でも、つまりは太刀行きの迅速さを訓練する作業である。

古流の剣法では、剣法の奥儀は相打ちにあるという。無住心剣流の開祖針ヶ谷夕雲は、こう言っている。

「上古より近代までの軍記共を見るに、相打ちを心安く思ひこめ、いつも相打ちよと心得たる武士は、一代運さへ尽きぬほどなれば、無類の勇を働きたることかぎりもなし。自分を全うして勝ちを取らんと思ひ打ちたる者、思ふままに勝ちを得たるは一人も見えず云々」

宮本武蔵と佐々木小次郎との仕合は、この理をよく語っている。二人は相寄るや同時に攻撃に出ている。もし、二人の武器が同じ長さを持っていたら、相打ちになっていたはずであった。武蔵が小次郎愛用の長剣物干竿より四寸か五寸長い木剣をたずさえていたため、小次郎の剣の切っ先が武蔵の鉢巻を二つに切って飛ばすと同時に、武蔵の木剣は小次郎の頭蓋骨をくだいたのである。

これは武蔵の仕合上手のいたす所だ。剣の奥儀が相打ちであるが故に、武蔵は特に長い木剣をこしらえ、この工夫

によって小次郎をたおしたのである。

柳生十兵衛が尾張侯の所望によって、ある浪人と仕合した時、十兵衛は相手の面を打ち、浪人は十兵衛の胴をはらった。誰の目にも相打ちと見えたが、十兵衛は、

「拙者の勝ちでござる」

と、主張した。

「相打ちでございます」

と、浪人は腹を立てて、異議を申し立てた。

「ばかを申せ、木剣の勝負ゆえ、相打ちなどどのんきなことを言っているが、真剣ならばそなたは死んでいる」

浪人は益々腹を立てた。

「それでは真剣で願ひましょう」

ついに真剣で勝負することになったが、相近づき、双方共に気合を發したと見るや、浪人は唐竹割りになってたお

れ、十兵衛は自若として立っていた。

十兵衛は微笑して、自分の右のわきの下を、尾張侯に見

せた。すると、その上着は切り裂かれていたが、下の肌着

には及んでいなかった。

「剣法とはこのようなものであります」

と説明したという。

剣法において太刀行きの迅速さの重要なことはこのようなものがある。一秒の何千分の一何万分の一だけ、敵の太刀行きよりこちらの太刀行きが遅ければ、こちらが勝つのである。敵が攻撃に出て来るのを、受けたら、かわした

り、飛びすぎたりして、それから攻撃に転ずるより、太刀行きの迅速ささえあれば、受けもかわしもせず、攻撃に出て、皮を斬らせて肉を斬り、肉を斬らせて骨を斬る方が、確実にきまっている。

示現流の立木打ちは、この習練のためである、はでで、巧緻で、見た目の見事な剣法ではない。あくまでも実戦の剣法だ。

立木打ちは、最も基礎的な稽古であるから終生を通じて怠ってならないが、ある程度それが出来るようになると、打ちまわりというのをやる。

高さ四尺から五尺くらいの丸太を何十本となく、不規則に立て、その間を縦横に走りまわり、駆けぬけながら、一つ一つ打つのである。狙いを正確にする習練をするわけだが、これも、あくまでも実戦の剣法であるからである。これも基礎訓練の一つであるから、終生続けなければならない。

以上の二つが相当に出来るようになると、各種の武器に對するあしらい方を教える。槍にはどう、薙刀にはどう、刺股にはどう、袖がらみにはどうと、これらをあしらい、制圧して、攻撃に転位して行く法を教えるのである。

その他、様々な型のあることは、他の流派の剣法と同じであるが、それらの型は、思うにさほど重要なものではなく、要は立木打ち打ちまわりの二つに尽きるようである。

これが当流のアルファでありオメガである。

こんな剣法なので、師匠にづかなくても、見よう見真似で、相当程度までは行ける。

前章の冒頭に書いた田中新兵衛がそれだ。新兵衛は、元来武士ではない。その前身は鹿兒島城下の「前の浜」の船頭だったという説があり、一説によると薬種問屋の倅だともいいう。桜田事変の少し前、水戸藩の志士連中と薩藩の志士連中の間に密約が結ばれた。即ち、水戸の連中が東で井伊大老を暗殺し、薩摩の連中が京坂地方で挙兵するという密約だ。

そこで、薩藩の連中は、国許を脱出する計画を立てたが、陸路をとっては、藩の追手がかかるので、海路をとることにして、鯉釣舟二艘を用意した。その時、その船の指揮を依頼されたのが新兵衛だ。こういう所を見ると、船頭説の方がよいようでもある。(第二十巻「幕末動乱の男たち」三刺客伝参照)

この計画は、藩侯に知られて、懇切な諭告書が下ったため実現に至らなかったが、新兵衛にとっては、彼が身分をこえて志士連中のなかま入りをするキッカケとなった。彼は二三年後には、京都に出て大いに活躍し、人斬り新兵衛の異名をとるほどの暗殺名人となつて、反対派の人々をして戦慄させる存在となるのであるが、元来武士でない彼がそんなに人斬りが巧みであるというのは、見様見真似で示

現流をやっていたからである。

多くの父の話だが、父の少年時代、即ち明治初年頃までは、薩摩の村の辻々には立木打ちの設備と木剣がそなえてあって、誰でも通りすがりに稽古出来るようになっていたというから、師伝によらなくても、ある程度使えるようになることは不思議ではなかったのである。

桐野利秋（前名中村半次郎）がまたそうだ。桐野は鹿児島城下の郊外、吉野村実方郷の郷士だ。吉野村というところは、高原地帯の山間部落で、耕地が至って少ない。郷士等は山畠を耕して薯をつくり、蕎麦を蒔き、雑穀をつくり、谷川に楮をさらして紙をすくという風で生活している。桐野の家は、この中でも貧しかった。とても、城下の武士連中のように、師匠をとって剣術の修業なんぞ出来ない。

そこで、彼はもっぱら独り稽古にはげんで、後年いくらか余裕が出来て、城下の示現流薬丸派の伊集院鴨居に弟子入りした時には、はじめから高弟の一人を以て遇せられたという。

桐野も、若い頃には「人斬り半次郎」といわれたくらい人を斬るのが巧みで、特に抜打ちにすぐれていた。

「こいつを斬る」

と、きめたら、行き交いにサッと抜打ちに斬って、決して斬りはずすことがなかった、という。

薩摩人の抜打ちは、維新当時、諸藩の人々に恐れられたものだという。特に居合にでも熟練している人は別とし

て、相当使える人でも、抜打ちする場合は、ちょっと足をとめなければならぬものだそうだが、示現流には特殊なわざがあって、全然歩調を変えないでそれが出来るので、防ぎがつかなかったというのだ。

桐野は、軒の雨だれが大地におちるまでの間に、三べん抜打ちが出来たというから、その迅速精妙は神業に類する。おそらく、これを演ずる時、彼の周囲には白い風が電光のようにめぐるのしか見えなかったであろう。

西南戦争の時、鹿児島県令でありながら、全面的に西郷軍に協力したため、後に死刑に処せられた大山綱良もまた示現流の達人で、軒の雨だれが地におちるまでの間に三度抜打ちが出来たという。

前述の通り、示現流の基本訓練は、専ら太刀行きの迅速さと正確さの訓練であるから、きまればその斬れることむごたらしいほどであったという。彰義隊が上野の山にこもっている頃、夜になるとしきりに辻斬りが行われた。官軍と見れば彰義隊側が斬り、彰義隊と見れば官軍側が斬って、競争の形であったが、薩摩人の斬ったのは一目でわかった。袈裟がけにヘソの下まで斬り下げてあって、その斬り口の徹底的なことは目を驚かせるほどであったという。

伏見鳥羽の戦いでも、薩軍が抜きつれて、絶叫しながら斬りこんで来ると、宛として死の旋風であったという。

西南戦争の時、官軍側の主計官として従軍した川口武定という人の著述に、「従征日記」というのがあるが、その

中にしばしば、薩軍の斬込み隊のすさまじさについての記述がある。

「ココニ一艱事アリ。賊ノ拔刀隊ト為ス。賊ヤヤモスレバ若干相伍シ、拔刀シテ吶喊^{なげん}研入^{けんい}ス。飄忽^{ひょうこく}、風雨ノ如シ。ワガ兵、銃ニ劍シテコレヲ防グモ、支フル能ハズ。毎ニソノ兇鋒^{けんほう}ノ敗ルトコロトナル云々」

「時ニ賊ハ四方ノ潰兵^{くわいへい}ヲアツメ、又吉次^{きちじ}（地名）ノ守兵ニ牒^だシテ、我軍ノ進路ノ側面ニ出デ、ワガ退線ヲ絶チ、截^たチテ三段トナシ、砲射スコブル猛烈、アルヒハ猿叫ノ吶喊^{なげん}ヲ発シ（薩人ノ吶喊ハ猿ノ叫ブニ似タルヲ以テ故ニ云フ）拔刀以テ研入セントス。ワガ軍、賊ノ後面ニ迫ルヲ見テ、皆ナ色動キ、回り走ラントス。士官等劍ヲ揮ヒテ叱咤^{しだ}シ、コレヲ制スト雖モ能ハズ、遂ニ死傷ヲ棄テテ退ク云々」

大体、こんな風だ。「猿叫ノ吶喊」というのが、示現流の気合だ。それはあらんかぎりの絶叫である。

三

示現流は、薩摩固有の剣法で、藩政時代にはお家流儀といわれていたが、元来は新陰流など多くの剣法と同じく関東から出ている。

鹿島、香取両神宮は武神であるという信仰からか、この両宮の神人等は、昔からひどく兵法の研究に熱心で、兵法上の名人、巨擘^{こはく}が輩出して、ぼくなんぞ日本のあらゆる兵

法は皆その源流をここに持っているのではないかと思つてゐるくらいであるが、示現流もまたこの神人であった飯篠長威斎家直の流派から出ている。

薩摩に伝わる説によると、こうなる。

飯篠長威斎によつて神道流がはじまり、その子威近^{きん}へ、威近からその子威信と再伝して、威信から同国（常陸）の住人で、やはり鹿島の神人である十瀬^{とせ}与三左衛門長宗に伝わった。長宗はこれに自らの工夫を加えて天真正自顯流と名づけ、同国の住人金子新九郎威貞に伝え、威貞はこれを同国の住人赤坂弥九郎に伝えた。

弥九郎、鹿島の神人の家に生れたが、十三の時、威貞の門に入つて、およそ十八九位までの間に皆伝を受けた。十九の年の十二月、ある事情によつて人を斬つたので、国に居がたくなつて陸奥に行き、後、出家して、曹洞宗の僧となり、法名を善吉と名のり、京都天寧寺の住職となった。薩摩に伝わったのは、この善吉和尚からである。

四

天正十六年といえは、豊臣秀吉が島津家征伐をした翌年、小田原征伐の前々年、北野の大茶の湯の行われた年である。

この年、薩摩の武士で東郷藤兵衛重位^{しげただ}という者が、京に上つて来た。（はじめ瀬戸口姓。この時代は瀬戸口であつたか、東郷姓になつてゐたか不明）

薩摩における一般の所伝では、蒔絵まきえの法、一説によると金工きんこうの法を習得のための上洛じやうらくであるといい、東郷家の所伝では、御奉公のための上洛であるといっている。

これはいずれも可能性がある。重位じゆうゐという人は、後年薩摩坊ノ津の代官に任命されて治績大いに上ったという履歴があるから、元来この地方の郷士ごうしではないかと思われるのだが、この地方は地味礪角ぢみりかくで、耕地の至って少ないところである。従って、この地方の郷士は、後世に至るまで、色色な副業を営んで、生活の足しにしている。たとえば家大工、舟大工、左官、桶屋等々、他国はもとよりのこと、薩摩内においてもめずらしい武士の生持なまぢを持っている。だから、重位が蒔絵や金工の修業のため京都に上ったとしても、説明はつくのである。

また、奉公のためというのも、この前年に島津家は豊臣秀吉の征伐を受けて降伏し、島津義久は秀吉に従って上洛しており、この年夏五月、また義久の弟義弘が上洛し、十七年の秋まで滞京しているから、重位がこの人々の供をして上洛したとしても不思議はないからである。

思うに、両説ともに認むべきであろう。即ち、重位は義久か義弘のいずれかに随従して京都に上っている間に、京都の蒔絵か金工の技術の精妙さを見て、帰国後の生活の足しにするために、公務の余暇を利用して、これを修業することをはじめたと解釈してよいと思う。

重位の宿舎の隣りは天寧寺という曹洞宗の禅寺であつ

た。重位の借りているへやから、寺内の庭が見えたというから、大して大きな寺ではなかったろう。京は寺や社を大事にするところで、ちよいとした寺は皆練堀れんぼりをめぐらしているが、この寺は竹の四ツ目垣かなんぞめぐらした、ごく小さな寺であつたろう。

ある日、重位が自分の居間に坐っていると、その天寧寺の和尚さんが庭掃除しているのが見えた。年は老っているが坊さんにはめずらしく逞しい骨格だ。サッサッサツと掃いて、やがて塵塚ちんづかに掃きこんでしまうと、坊さんは不思議なことをはじめた。箒を両手にとつて、ふり上げては、サッ、サッ、と、ふりおろす。どうやら、剣法の型をつかっているように思える。

「ホウ……」

重位は目を澄まして凝視していた。

きつと重位は、この時まで相当この道に修行を積んでいたものであろう。この坊さんの使う剣法の型にほれこんでしまった。古書には、「ソノ法モットモ奇ナリ」とある。

そこで、坊さんの所に行つて、弟子入りをし、伝授を受けた。

この坊さんが、前述の、天真正自顕流てんしんじょうけんりゅうの正系を伝えている赤坂弥九郎、当時善吉と名のる人であつた。

一説によると、こうある。

この宿舎に逗留中、重位じゆうゐは毎日庭に出て立木をたたいて刀術をこころみていたが、ある時、いつも遊びに来て懇

意になっている天寧寺の小僧が、こう言う。

「藤兵衛さん、うちの和尚さんがなあ、こう言わはったえ。となりに泊つとる薩摩のお武家はえらい兵法執心やが、あんまり上手やないなあ、立木をたたく音聞いててもわかるわいと」

「ホウ。そなたの寺の和尚は兵法がわかるのか」

「どうやか知らん。しかし、そう言わはったとこみると、わかるのやろな。和尚さんは、もと関東のお武家やちゅうことやさかい」

そこで、重位は寺に行つて、善吉和尚に会い、辞をひくくして兵法の伝授を乞うたが、和尚はウンといわない。

「わしは仏道修行の者、仏道のことなら、いくらか知らんこともないが、兵法などさらに心得がござらん」

重位は根氣よく毎日出かけたが、いくら頼んでも駄目だ。

数カ月、空しくたつて、天正十六年も暮れかけた頃のある夜、いつものごとく出かけて、また願つたが、善吉は依然として言を左右にたくして教えようといわない。

やむなく帰りがけて、縁側に出ると、折しもさし上つた二十三夜の月が、障子に照りわたっている。重位はそれを見て、

濁り江にうつらぬ月の光かな

と、高声に詠んで、すたすたと行きかけると、サラリと障子があいて、善吉は声をかけた。

「客人！」

「なんです」

「ちよともどられよ」

かえると、善吉の態度がこれまでとまるで違う。

「かねてからの懇望、もだしがたし。存じおるかぎりは教え申すべし」

その夜から、教えはじめて、翌年の夏までの間にすっかり伝授したというのである。

この時、重位は二十九歳であつた。

五

このようにして、天真正自顕流の剣法が薩摩に入る機縁を得たわけだが、この以前、薩摩で盛行していた剣法は、肥後人吉の人、丸目藏人を流祖とする体捨流の剣法であつた。

体捨流の剣法は、「撃剣叢談」によると、こうある。

「この流のつかい方は、前後縦横に飛びめぐり、切り立て、薙ぎ立てするやり方なり。甚だ奇なり」

おそらく、重位はこの体捨流を相当なところまでこなしていたので、わずかに半年くらいの修行で、天真正自顕流を皆伝することが出来たのであろう。また、彼においてこの両流が折衷せられたことも考えられる。ここにあげた体捨流のつかい方は、今日の示現流の方法と実によく似ている。しかし、この時までには、彼はまだ新しい流派を名のら

ない。天真正自顕流の名を墨守している。彼が示現流と名のつたのは、ずっと後年のことに属する。

重位は、帰国後、新しく会得した剣法の修練につとめたが、もっぱら独りの稽古であつたらしく、まだ世に聞えないこと数年にわたる。

彼が三十二の時、豊太閤の朝鮮役がおこつた。薩摩からも義弘、その子久保が渡鮮しているから、定めて重位も従軍したろうと思うが、格別聞えた功名はない。

三十八の時、太閤の死亡とともにその遺命によって、在鮮の諸將は皆引上げることとなり、その引上げぎわに、有名な泗川の役があり、島津軍は五千の寡勢を以て明軍二十万を撃破潰走させた快勝を博したが、この時も別段の勲功はない。あるいは、従軍しなかったのかも知れない。島津家は、この朝鮮役にははなはだ氣乗り薄で、軍勢の繰り出し方など、出来るだけ少なくしているから。

重位が四十になつた時、関ヶ原の戦争がおこっているが、これには従軍していない。

この戦きには、西軍に加担した責任を問われて、義弘は隠居し、子家久が島津家の当主となつた。

重位の名が高くなつたのは、この頃からである。従つて学ぶ者が多く、剣名はようやく薩摩全土にひろがつた。

島津家の重臣に、頼娃主水、仁礼佐渡守忠頼という者が、この時代にあつた。かねて体捨流を學んで奥儀を得、朝鮮陣にも従軍して拔群の勲功があり、勇名の高い人々で

あつた。この頼娃主水が、重位の剣名を聞き、重位の家に出かけた。

門前で馬を下りて、入つて重位に会うや、言う。

「藤兵衛、そなたは天真正自顕流とかいう上方下りの兵法をようつかうそうなが、おいと仕合しよう」

重位はかしこまって答えた。

「未熟ものでござす。お前様のようなお方と仕合うなど、思いもよらぬこと。平に御容赦を」

「芸の道に何の身分のへだてがあろうか。切に所望じゃ。立合つてくれるよう」

しかたがなかつた。

「それでは、未熟ながら、ごらんいただきもす」

二人は身支度して、庭先におり立つた。

「ヤー」

主水は、すさまじい氣合と共に打ちこもうとしたが、重位の八双に取つた構えには寸分のすぎがない。いや、すぎがないのではない。すぎは至るところにあるが、天に冲せよと高く剣尖をそびえ立たせた刀が、異常な圧力を以て鈍とおさえつけている。

主水は残念でならない。なにほどのことがあろう、と、はねかえそうすると、こんどは剣だけでなく、重位のからだ全体が巨大な巖となつて眼前に立ちふさがっているように、手も足も出ない。呼吸がはずみ、全身に汗が浮き、氣が遠くなるようであつた。